指導上の注意点

●二四三ページ

問⊙「そのくらいの仲である。」（上9行目）という表現から、どのようなことが分かるか。

答 私とエノモトさんは、ときどきコーヒーを飲んで世間話をする程度の、特別親しい関係ではないということ。

語句の研究

●二四三ページ

上1妙なもの　人魚のこと。後（二四四・上2、3）にも同じ表現が繰り返され、「わたし」同様に読者も「妙なもの」の正体に興味を持つようになる。印象的な冒頭部分である。

キー・ポイント　エノモトさん　カタカナ表記により、読み手が自由に人物像を思い描くことができる。「画家兼高校教師」であり、「わたしの部屋の真上の部屋に住んでいる」ことや、部屋の様子、コーヒーの淹れ方などが詳細に描かれる一方で、外見に関する描写は「髭をしごいた」（二四五・下7）こと程度で、ほとんどない。川上弘美は「あまり登場人物に色がつかないように」「カタカナにすることが多い」と述べている。（「広告批評」一部を書いて全部を書きたい　マドラ出版　平成十三）

上6とんとん　ここでは階段を上り下りする擬音語。軽快な印象で、エノモトさんとの気軽な間柄が連想される。

上11男所帯　男だけで女のいない暮らしのこと。他に「髭をしごいた」（二四五・下7）という部分で、エノモトさんの性別が分かる。

下3輪郭がくっきり　「画の道具」「カメラ」「雑誌」など、モノが多数置かれている部屋だと分かる。エノモトさんの人物像を想像する手がかりになる箇所でもある。

下6手動のミルで豆を挽き、布で漉す。　エノモトさんのこだわりの一面。本人の外見描写はほとんどないが、このように様々なモノを配置して人となりを表現している。

下8たいへんよろしきものなのである。　文語的な表現。「わたし」がエノモトさんのコーヒーを楽しみ、またありがたいものとして頂戴している様子とも読める。川上弘美は「よく古い言葉を使ってるって言われます。自分ではそんなつもりはないんだけど、書いているうちに自然と出てくるみたいで。」と述べている。（「広告批評」一部を書いて全部を書きたい　マドラ出版　平成十三）

●二四四ページ

キー・ポイント　桜が咲きはじめていた。　これ以降、要所要所で桜が描かれ、場面状況のと密接に関連した役割を果たす。エノモトさんが人魚を手に入れたのは物語の「二か月ほど前」、つまり二月初旬、桜のつぼみが膨らみ始める時期である。そして物語が始まるのが「咲きはじめ」の時期なので四月初旬、「わたし」が人魚を預かって一週間後に満開を過ぎ散り始め、最後の場面では「すっかり散って」いる。このように時間の推移が告げられつつ、それぞれの場面の印象を強めている。また、桜の満開に向けて人魚への執着度の高まりを示し、クライマックスである海の場面では、降り注ぐほどの花びらと人魚からの強烈な執着の恐怖を印象付ける効果もある。さらに、桜と人魚の描写を重ねることで、すべては桜がもたらした幻想のようにも読めるだろう。

注意する語句

（＊で用例を示した）

うっちゃる…ほうり出す。ほったらかす。

＊宿題をうっちゃって友達と遊ぶ。